



日本地球化学会ニュース

No. 215 December 2013

Contents

年会・総会報告	2
2013年度日本地球化学会第60回年会実施報告	
平成25年度日本地球化学会・夜間集会報告	
2013年度日本地球化学会総会報告	
学会からのお知らせ	14
第8回日本地球化学会・日本鉱物科学会両学会合同ショートコース報告書	
学会賞など受賞候補者推薦の募集	
2014年度第1回鳥居基金助成の募集	
評議員会議事録	14
2013年第3回日本地球化学会評議員会議事録	
2013年第4回日本地球化学会評議員会議事録	
研究集会報告とお知らせ	19
2013年度第1回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-75)	
2013年度第1回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-76)	
書評	25
「海はどうしてできたのか」(藤岡換太郎)	

年会・総会報告

●2013年度日本地球化学会第60回年会実施報告

日本地球化学会年会実行委員会庶務
遠嶋康徳・野尻幸宏
(国立環境研究所・地球環境研究センター)

2013年度日本地球化学会第60回年会在9月11日(水)から13日(金)までの3日間、筑波大学で開催された。つくば地域での年会は1999年に当時の工業技術院筑波研究センター(現・産業技術総合研究所)での開催以来14年ぶりのことである。昨年の九州大学での年会終了後、つくば地域の国立環境研究所・筑波大学・気象研究所・産業技術総合研究所に所属する日本地球化学会員有志が集まり年会実行委員会を立ち上げ、本年度の年会終了までの運営がなされた。

今回の年会は日本鉱物学会と合同開催することが既に両学会の間で取り決められており、それをどのような形で実現するかが我々に課せられた課題となった。日本鉱物学会では過去に他学会と合同開催の経験があるが、日本地球化学会としては60回の年会の歴史の中で初めての経験である。そもそも、開催期間をどの程度重ねるのか、共同で運営するセッションを立ち上げるか、といった基本的なことから考える必要があった。そこで、日本鉱物学会の日本地球化学会との年会合同開催準備委員会を2012年10月1日と同年11月30日に開催し、合同開催の基本方針について協議した。その結果、①両年会は同日開催とし会場も隣接させる、②両学会員が相互に自由に発表できる共通セッションを4つ設ける(2つのセッションを地球化学・鉱物がそれぞれ担当する)、③どちらかの年会に参加登録すれば両年会の聴講と質疑応答への参加を自由とする、④学会2日目の講演終了後合同で懇親会を開催する、等の方針が確認された。

共通セッションのテーマには、地球外物質化学、炭酸塩の地球化学、地球内部・高压化学、水-岩石相互作用、の4つが選ばれ、前者2つを地球化学会が担当することとなった。なお、本年会は日本鉱物学会以外にも、筑波大学、日本化学会、日本質量分析学会、日本地質学会、日本分析化学会に共催団体として加わっていただいた。特に、講演会場として多くの教室や講堂を無償で提供していただいた筑波大学にはこの場を借りて御礼申し上げる。

上記4つの共通セッションに加えて学会固有のセッションを設け、そのセッションの中ですべての発表を行うという発表方法を今年度も採用した。テーマ設定と各セッションのコンピーナーの依頼は学会の企画委員会が中心となって行った。最終的に一般公募による2件の特別セッションと18件の基盤セッションが設定された。なお、今年度は基盤セッションのテーマに「原発事故で放出された放射性核種の環境動態関連」が採択され、原発事故によって放出された放射性核種の拡散状況に関する多数の研究報告(口頭14件・ポスター11件)がなされた。福島原発事故から2年以上が経過したところで、改めて放射性核種の分布状況や拡散・輸送機構を地球化学的な視点から解明しようとするものである。本年会の関連行事として企画された市民講演会においても福島原発事故での放射性物質の分布状況をテーマとしたこともあり、非常に時宜に合ったセッション設定であったといえる。

今年度は共同開催ということもあり、講演申込からプログラム編成までのスケジュールの調整でも苦労した。例えば、共通セッションの講演申込締切りは鉱物学会のスケジュールに合わせなければならず、固有セッションでの講演申込締切りより3週間以上早い6月23日が締切日となった。そのため、共通セッションへの申込をうっかり忘れるといった混乱が生じるのではないかと危惧されたが、メーリングリスト等による積極的な案内が功を奏したのか、大きなトラブルもなく講演申込がなされた。

講演申込の締め切りと同時に、各セッションコンピーナーに申込のあった講演内容を連絡し、ポスター・口頭発表の決定、各セッションの講演順番の決定をお願いした。口頭発表申込件数が著しく少ないセッションについては、ポスター発表から口頭発表に変更してもらおうといった調整を若干行い、最終的には、口頭発表が221件(鉱物学会担当共通セッションの26件を含む)、ポスター発表が92件(鉱物学会担当共通セッションの6件を含む)となった。こうした作業と並行して、プログラム編成作業を実施した。口頭発表は4会場でもタイトに詰めれば実施可能と思われたが、十分な休憩時間の確保が難しくなることや、特に1日目のセッション開始時間を同一時刻にしまうと受付が混雑する可能性があることから、余裕をもったプログラム編成となるよう5会場とした。また、ポスター発表については、全ポスター分のポスターボードを用意し、3日間の会期中常時掲示できる

ようにした。また、ポスターのコアタイムは1日目と3日目の12:30~14:00の1時間30分を充てた。

プログラム編成がほぼ完成した段階で、8月5日に年会ウェブページ上でプログラムを公開した。また、要旨は8月31日にJ-Stage上で年会に先駆けて公開された。しかし、J-Stageからは1件ずつ要旨をダウンロードすることしかできず、例えば一つのセッション全体の要旨が見たい場合には使い勝手が悪い。そこで、今年度は会場毎に1日分の要旨全体を一つのPDFファイルとして年会ウェブページからダウンロードできるようにし、9月4日に地球化学会メーリングリストで年会講演要旨のウェブ掲載についてお知らせした。(また、年会会場でも希望者にUSBメモリを使って要旨を配布した。)実際にこのPDF版要旨がどの程度利用されたかは確認できていないが、将来の要旨集のペーパーレス化も視野に入れながら、このようなサービスを今後も継続してゆく必要があると考えている。

今回の年会の参加登録者は、総計416名(うち学生135名)で、内訳は事前申込337名、当日申込79名であった。また、具体的な人数は把握していないが、会場には鉱物科学会の名札を下げた参加者も数多く目にするのができ、共同開催であることを実感することができた。

口頭発表ではすべての会場に共用PCを用意し、発表前に事前に各自の発表用ファイルを共用PCに移しておくことを推奨した。これは、PCの切り替え時のトラブルをなくすための対策であるが、実際には持参したPCを利用する方々も大勢見受けられた。しかし、PC関連でのトラブルによるプログラム進行の遅れといったことはほとんど発生しなかった。また、会場規模と各セッションの配置(座席数と参加者人数の予測)は頭を悩ませる問題であるが、結論として、どの会場も混雑することもなく、また逆に参加者に対して会場が広すぎるということもなく、ちょうどよい選択であったと自負している。

ポスター会場には口頭発表会場と同じ建物の1階の広間とそれに隣接する廊下と教室を充てた。また、広間の中心のスペースに企業展示会場を設け、9社(アメテックカメラ、三洋貿易、安井機械、紀本電子工業、ビジネスリンクジャパン、PTT、サーモフィッシュャーサイエンティフィック、SIサイエンス、ジャスコインターナショナル)の企業展示を行った。企業展示会場が年会発表会場から離れていたため人があま

り集まらないということが過去の年会ではあったようであるが、今年はポスター会場と同じフロアに企業展示を配置することで参加者の目に必ず触れるようにした。その結果、企業側からも今年は人の集まりがよいとの高評価をいただいた。なお、企業展示をしていた9社と、企業広告のみの掲載していただいた地球科学研究所には年会の財政面での貢献もしていただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

1日目の夜には夜間集會が開かれ、ゴールドシュミット2016準備状況の紹介、学会の将来計画への対応、学会誌のあり方などの議論が交わされた。

2日目の午後は総会と受賞講演會が筑波大学の学生会館講堂で行われた。本年度の受賞者は学会賞が野尻幸宏会員(国環研)、奨励賞が亀山宗彦(北大)・白井厚太郎(東大)・光延聖(静岡県立大)の3会員であった。総会での表彰式の後、受賞講演が行われ多くの参加者が講演會に参加した。なお、昨年度奨励賞を受賞した澁谷岳造会員(JAMSTEC)は長期海外渡航中で昨年の年会に参加できなかったため表彰式と受賞講演をこの場で行った。

受賞講演會の後、18時から東雲グランドホテルにおいて鉱物科学會との合同懇親會が開かれた。学会会場である筑波大から懇親會会場までの移動は貸し切りバスによって行った。地球化学會側は受賞講演會の終了後学生会館講堂から、また、鉱物科学會側は年会会場からの移動となり、講演プログラムの遅延や途中の交通状況によって懇親會の開始時刻の遅れも予想されたが、10分程度の遅れで済んだ。地球化学會側の参加者総数は187名(うち学生37名、予約申し込み160名、当日申込27名)、鉱物科学會側の参加者総数は96名、総勢283名の盛大な懇親會となった。

3日目の最後の講演が終了した後、直ちに閉會式が開かれた。閉會式では優れた口頭・ポスター発表を行った学生会員に授与される学生発表賞の授賞式が行われた。口頭発表3件、ポスター発表2件が選ばれ、副賞と合わせた表彰が行われた。閉會式の参加者も多く、学生発表賞受賞者を祝福して盛會のうちに終えることができた。

年会の関連行事として年会前日の9月10日に大学生・大学院生を対象とした第8回ショートコースがつくばサイエンス・インフォメーションセンターにおいて開催された。なお、今回はショートコースにおいても日本地球化学會と日本鉱物科学會の共同開催であった。また、前述のように、年会終了翌日の9月14

日には市民講演会を開催し、東京電力福島第一原子力発電所事故由来放射性物質の分布状況を最新の研究成果をもとに6人の講師の先生方に講演していただいた。およそ200人の参加があり、陸や海、魚や農産物の汚染状況といった生活に密接に関連したテーマを真剣に聞き入っていた。また、講演後の質疑応答では参加者が日ごろ抱えている不安や疑問に対して講師の先生方に丁寧に回答していただき、非常に意義ある講演会となった。

本年度の年会は天候にも恵まれ、大きなトラブルにも見舞われることもなく、日本鉱物科学会との共同開催も成功裏に終わったことは非常に喜ばしいことである。つくば地域は、所属会員数がかなり多く、前日から当日の準備では20名近い会員での分担ができた。また、会場費・冷房費など筑波大学の共催で無料となり、例年と同程度の参加費で十分な運営ができた。しかし、分担ができる会員数の少ない開催地で運営の多くを外注にしようとするれば、同程度の参加費で開催することは困難である。地球化学会ではおおむね関東地域とそれ以外の地域で隔年の開催を維持しているが、地方開催に関しての工夫が必要になってくることを感じた。

最後に、2013年度日本地球化学会第60回年会に参加していただいた皆様に心より感謝を申し上げたい。

●平成25年度日本地球化学会・夜間集会報告

平成25年9月11日(水) 筑波大学において参加者32名で夜間集会を開催した。本年度の議題は、1) Goldschmidt 国際会議の準備状況、2) 和文誌「地球化学」の今後、3) セッションに関する提言(将来計画委員会 WG)、4) 地球化学会の50年後、2040年にいたる研究の夢ロードマップ、であった。

1) Goldschmidt 国際会議の準備状況については、益田 GC 2016準備委員長より Goldschmidt 2016の正式受諾、会場としてパシフィコ横浜に決定したこと、準備委員会組織などに関する報告があった。今後は、学術会議への補助金の申請、プログラム委員会の設立、国内外の関連学協会との連携強化等を図ることが説明された。

2) 和文誌「地球化学」の今後の検討課題について、高橋編集委員長より説明があった。特に、依頼原稿を増やすこと、印刷業者の変更、電子出版化などについて提案がなされた。会場からは、地球化学をオープンアクセスにしてはどうか、との意見が提案され

た。

3) 年会のセッションについて、丸岡将来計画 WG 主査より、他学会の現状が報告され企画集会の提案がなされた。これは、GC 2016に向けて企画を掘り起こすこと、若手の企画力を増強すること、他学会の人を取り込むことを目的とする。これに対し、会場から

- ・一般課題セッション、特別課題セッションの差別化をしてはどうか(特別課題では発表時間も自由裁量)
 - ・企画集会(時間が必要)の時間を出すために一般の講演の時間をしぼる
 - ・特別セッションではレビューしてくれる人を招待する。ただし、講演時間の延長を目的に招待講演とするのはあまりよくない
 - ・人数の少ないセッションが厳しくなる
- などの意見がだされた。

4) 地球化学会の50年後、2040年にいたる研究の夢ロードマップについて、川幡次期会長より説明がなされた。

- ・2040年にいたる研究の夢ロードマップ: 文科省から問い合わせがあった時、優先順位をつけて提案できる様なロードマップ作成が必要である。すぐに役立つわけではないがテクノロジーとサイエンスのレベルを高くするロードマップを描いておくべきであろう。
- ・学術大型研究計画への提案: 平成25年3月の募集に向けて、学術大型研究計画を策定したが、十分な時間も無く多くの意見を取り入れることができなかった。地球化学会として提案するのであれば、公開意見集約を取り入れるべきであろう。
- ・学会としての夢ロードマップ、大型研究計画に関しては、来年の年会においてコミュニティーで意見を集約するとともに、TFを策定して取りまとめを進めることを計画している。

●2013年度日本地球化学会総会報告

庶務幹事 豊田 栄

(東京工業大学 大学院総合理工学研究科)

日時: 2013年9月12日 13時00分~14時45分

場所: 筑波大学 大学会館講堂

第60回年会(筑波大学第一エリア)期間中に開催した。

1. 開会宣言
2. 故本田雅健名誉会員を偲んで、出席者全員で黙祷を捧げた。
3. 議長選出
張 勁会員（次期年会 LOC）が議長に選出された。
4. 会長挨拶 吉田尚弘会長
5. 大会委員長挨拶 野尻幸宏委員長
6. 議事
 - 1) 2012年度事業報告および決算報告、監査報告
2012年度事業報告（豊田庶務幹事）、決算報告（南会計幹事）、監査報告（清水監事）が行われ、承認された。
 - 2) 2013年度事業中間報告および会計中間報告
2013年度事業（豊田庶務幹事）、会計（南会計幹事）について中間報告が行われた。
 - 3) Goldschmidt 2016国際会議準備委員会への資金貸付について
吉田会長から準備委員会へ活動資金200万円を貸し付ける提案が説明され、承認された。
 - 4) 2014年度事業計画および予算案
2014年度事業計画案（豊田庶務幹事）および予算案（南会計幹事）が提案され、承認された。
 - 5) 各種報告
高橋選挙管理委員長が2014～2015年度役員選挙結果を報告した。
原田幹事が Goldschmidt 2013フィレンツェ会議の報告と2014サクラメント会議の概要についての紹介を行った。
7. 会場からの意見、提案など
特になし
8. 2012年度日本地球化学会賞、日本地球化学会奨励賞授賞式
 - 1) 日本地球化学会奨励賞
亀山宗彦会員「長時間分解能分析法を用いた海洋表層における揮発性有機化合物に関する研究」
 - 2) 日本地球化学会奨励賞
白井厚太郎会員「微小領域分析法を用いた生物起源炭酸塩骨格の微量元素変動メカニズムに関する研究」
 - 3) 日本地球化学会奨励賞
光延聖会員「X線吸収分光法を駆使したアンチモンやヒ素などの地球表層での挙動に関する研究」

- 4) 日本地球化学会奨励賞（2012年度）
澁谷岳造会員「地球史を通じた海底熱水系進化に関する地質学的・地球化学的・実験的研究」
- 5) 日本地球化学会賞
野尻幸宏会員「大気水圏の炭素循環と地球温暖化に関連する地球化学的研究」
吉田会長から各賞受賞者に賞状とメダルが授与された。
9. 中国鉱物岩石地球化学学会の Cong-qiang Liu 前会長による挨拶と中国における科学研究を取り巻く状況についての講演があった。
10. 議長解任
11. 閉会宣言

2012年度事業報告

1. 会員状況（2012年1月1日～12月31日）

	正会員	一般	(学生)	(学生バグ)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	海外会員
2012.1.1	913	731	63	61	58	9	11	933	35
入会	49	13	9	27	0	1	0	50	0
退会	-43	-25	-10	-3	-5	0	0	-43	0
逝去	-1	0	0	0	-1	0	0	-1	-1
変更	0	2	21	-29	6	0	0	0	0
除名	-22	-12	-10	0	0	0	0	-22	-2
2012.12.31	896	709	73	56	58	10	11	917	32

2. 年会、委員会等開催

日本地球惑星科学連合2012年大会（5/20～25、幕張メッセ国際会議場、Goldschmidt 2012（6/24～29、カナダ、モントリオール）、年会（9/11～13、九州大学）、総会（9/12、九州大学）、評議員会4回（2/11、6～8月（電子メール審議）、9/10、9/11）、幹事会4回（2/4、5/20、9/1、12/22）、GJ編集委員会2回、地球化学編集委員会1回、学会賞等受賞者選考委員会1回、鳥居基金選考委員会2回、広報委員会4回。

3. 会誌発行

Geochemical Journal : Vol. 46（1～6）

地球化学 : Vol. 46（1～4号）

4. ニュース発行

No. 208（4/16）、209（7/16）、210（9/5）、211（12/31）（和文誌「地球化学」と合本）。

5. 第7回地球化学ショートコースの実施（9/10）

6. 日本地球化学会賞等の授与（学会賞1件、奨励賞3件）

7. GJ賞授与（Goldschmidt 2012会場にて）

8. 鳥居基金助成
第1回：海外渡航1件，国内研究集会1件，第2回：海外渡航1件
9. 学会などの共催，後援，協賛
- ・第18回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会（2012/6/14～15，地盤工学会，後援）
 - ・Goldschmidt 2012（6/24～29）共催
 - ・第49回アイソトープ・放射線研究発表会」（2012/7/9～11，日本アイソトープ協会，共催）
 - ・第40回可視化情報シンポジウム（2012/7/24～25，協賛）
 - ・可視化情報全国講演会（2012/10/4～5，協賛）
 - ・日本地球化学会H24年学術講演会（2012/10/24～26，協賛）
 - ・3rd Asia-Pacific Conference on Luminescence and ESR dating（2012/11/18～22，岡山理科大学，共催）

2013年度中間事業報告

1. 会員状況（2013年1月1日～8月31日）

	正会員	一般	(学生)	(学生/バカ)	(シニア)	賛助会員	名誉会員	計	海外会員
2013.1.1	896	709	73	56	58	10	11	917	32
入会	47	13	8	26	0	0	0	47	0
退会	-6	-4	-3	0	1	-1	0	-7	0
逝去	-2	-1	0	0	-1	0	-1	-3	0
変更	0	20	7	-29	2	0	0	0	0
除名	1	1	0	0	0	0	0	1	0
海外移住									1
2013.8.31	936	738	85	53	60	9	10	955	33

2. 年会，委員会などの開催

日本地球惑星科学連合2013年大会（5/19～24，幕張メッセ国際会議場），Goldschmidt 2013（8/25～30，イタリア，フィレンツェ），年会（9/11～13，筑波大学），総会（9/12，筑波大学），評議員会3回（2/9，6～8月（電子メール審議），9/10），幹事会3回（2/2，5/25，9/7），GJ編集委員会1回，地球化学編集委員会1回，学会賞等受賞者選考委員会1回，鳥居基金選考委員会2回，広報委員会1回。

3. 会誌発行

Geochemical Journal：Vol. 47（1～4）

地球化学：Vol. 47（1～3号）

4. ニュース発行

No. 212（4/19），213（7/19），214（9/5）（和文誌「地球化学」と合本）。

5. 第8回地球化学ショートコースの実施（9/10）
6. 日本地球化学会賞等の授与（学会賞1件，奨励賞3件）
7. GJ賞の授与（Goldschmidt 2013会場にて）
8. 鳥居基金助成
第1回：海外渡航1件，国内研究集会1件
9. 学会などの共催・後援・協賛
- ・第19回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会（6/13～14，日本地下水学会ほか，後援）
- ・第50回アイソトープ・放射線研究発表会（7/3～5，日本アイソトープ協会，共催）
- ・第41回可視化情報シンポジウム（7/16～17，可視化情報学会，協賛）
- ・国際火山学地球内部化学協会2013年学術総会（IAVCEI 2013 Scientific Assembly，7/20～24，日本火山学会，後援）
- ・第1回レーザーワークショップ（9/4，レーザー分光分析研究会，協賛）
- ・第57回粘土科学討論会（9/4～6，日本粘土学会，共催）
- ・第61回質量分析総合討論会（9/10～12，日本質量分析学会，共催）

2014年度事業計画

1. 年会：富山大学（2014年9月上旬）
2. 総会：富山大学（年会期間中）
3. 日本地球惑星科学連合2014年大会（4/28～5/2，パシフィコ横浜）
4. ゴールドシュミット2014（6/8～13，アメリカ，サクラメント）
5. 評議員会3回（うち1回は電子メール審議）
6. 幹事会4回
7. 会誌発行
Geochemical Journal：Vol. 48（1～6）
和文誌「地球化学」Vol. 48（1～4）
8. ニュース発行 No. 216～219
9. 日本地球化学会賞等の授与
10. 鳥居基金助成2回（1月，7月）
11. 学会などの共催・協賛

2012年度日本地球化学会決算報告（2012年1月1日～12月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	7,829,500		8,505,000	
(内訳) 一般正会員		6,640,000		7,120,000
学生正会員		444,500		531,500
シニア正会員		285,000		315,000
賛助会員		200,000		180,000
海外会員		260,000		358,500
2. 刊行物売上	3,375,160		3,771,360	
3. 広告料	1,030,000		600,000	
(内訳) 地球化学		720,000		480,000
会員名簿		0		0
ウェブ		310,000		120,000
4. 出版助成	2,700,000		2,700,000	
5. 公開発表助成	0		0	
8. 雑収入	1,313,713		50,000	
9. 前年度名簿積立金	0		0	
10. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
11. 前年度繰越金	13,628,041		9,734,291	
収入計	33,276,414		28,760,651	

支出の部

科目	支出額 (円)		予算額 (円)
1. 事業費	15,360,733		14,712,000
1.1 出版費	12,828,140		11,652,000
1.1.1 印刷費	10,578,666		9,500,000
1.1.2 編集費	1,300,000		1,400,000
1.1.3 電子化経費	252,000		252,000
1.1.4 発送費	697,474		500,000
1.2 行事費	448,929		600,000
1.3 公開発表助成	0		0
1.4 学会賞経費	74,897		80,000
1.5 委員会活動費	64,400		200,000
1.6 名簿積立金	150,000		150,000
1.7 名簿作成費	0		0
1.8 会員業務委託費	1,777,382		2,000,000
1.9 会員業務郵税	16,985		30,000
2. 管理費	1,420,340		1,460,000
2.1 庶務費	100,000		100,000
2.2 会議費	0		50,000
2.3 通信費	0		10,000
2.4 旅費	702,440		600,000
2.5 選挙費	0		0
2.6 会計費	0		50,000
2.7 雑費	8,610		50,000
2.8 ホームページ費用	401,100		400,000
2.9 雑誌保管費	208,190		200,000
3. 予備費	169,200		400,000
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000
7. 次年度繰越金	12,926,141		8,788,651
支出計	33,276,414		28,760,651

1.1. 出版費明細

事項	英文誌	和文誌	ニュース	その他	支出計
1.1.1 印刷	7,910,091	2,668,575	←	0	10,578,666
1.1.2 編集	1,100,000	200,000	0	0	1,300,000
1.1.3 電子化	252,000	0	0	0	252,000
1.1.4 発送	71,641	565,983	←	59,850	697,474
出版費計	9,333,732	3,434,558	0	59,850	12,828,140

英文誌：Geochemical Journal：Vol.46，No. 1～6。

和文誌：地球化学：Vol.46，1～4号（ニュースNo.208～211を合本発行）。

ニュース印刷費は和文誌に含まれる。

英文誌No.2～4，6号は和文誌と同時発送し，発送費は和文誌に含まれる。

貸借対照表 (2012年12月31日現在)

資産の部		負債・正味財産の部	
現金	103,710	前受会費	1,432,500
普通預金 (会計)	1,118,247	基本財産充当引当金	3,400,000
普通貯金 (会長)	11,198,490	正味財産 (繰越金)	12,926,141
国際文献印刷 郵便振替	3,578,500	計	17,758,641
国際文献印刷 みずほ銀行	1,759,694		
計	17,758,641		

2012年度鳥居基金決算報告 (2012年1月1日～12月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額 (円)	科目	金額 (円)
1. 前年度繰越金	2,203,753	1. 助成	300,000
2. 普通貯金利息	311	内訳 助成100,000円 3件	
3. その他	0	2. その他	2,100
収入計	2,204,064	内訳 降り込み手数料 4件	
		3. 次年度繰越金	1,901,964
		支出計	2,204,064

資産状況	
科目	金額 (円)
普通貯金	1,901,964
定額貯金	0
資産計	1,901,964

2012年度ゴールドシュミット国際会議基金決算報告 (2012年1月1日～12月31日)

収入の部		支出の部	
科目	金額 (円)	科目	金額 (円)
1. 前年度繰越金	2,183,378	1. Goldschmidt 2012共催金	246,570
2. その他	0	2. その他	56,621
収入計	2,183,378	内訳 振り込み手数料	8,000
		物品輸送費用	48,621
		3. 次年度繰越金	1,880,187
		支出計	2,183,378

2013年度日本地球化学会中間決算（2013年1月1日～7月31日）

収入の部

科目	収入額（円）		予算額（円）	
1. 会費収入	8,033,000		8,117,000	
(内訳) 一般正会員		6,960,000		6,726,000
学生正会員		418,000		578,000
シニア正会員		310,000		280,000
賛助会員		180,000		200,000
海外会員		165,000		333,000
2. 刊行物売上	0		0	
3. 広告料	0		600,000	
(内訳) 地球化学		0		480,000
会員名簿		0		0
ウェブ		0		120,000
4. 出版助成	2,900,000		0	
5. 公開発表助成	800,000		0	
8. 雑収入	311,227		50,000	
9. 前年度名簿積立金	0		0	
10. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
11. 前年度繰越金	12,926,141		8,788,651	
収入計	28,370,368		20,955,651	

支出の部

科目	支出額 (円)		予算額 (円)	
1. 事業費	5,000,626		8,952,000	
1.1 出版費		3,353,454		6,102,000
1.1.1 印刷費		1,849,249		3,600,000
1.1.2 編集費		1,300,000		1,350,000
1.1.3 電子化経費		0		752,000
1.1.4 発送費		204,205		400,000
1.2 行事費		58,060		600,000
1.3 公開発表助成		0		0
1.4 学会賞経費		42,605		80,000
1.5 委員会活動費		84,000		200,000
1.6 広報委員会経費		150,000		150,000
1.7 名簿作成費		0		0
1.8 会員業務委託費		1,303,387		1,800,000
1.9 会員業務郵税		9,120		20,000
2. 管理費	732,619		1,690,000	
2.1 庶務費		0		100,000
2.2 会議費		0		30,000
2.3 通信費		0		10,000
2.4 旅費		545,100		600,000
2.5 選挙費		0		50,000
2.6 会計費		0		50,000
2.7 雑費		23,529		50,000
2.8 ホームページ費用		107,100		600,000
2.9 雑誌保管費		56,890		200,000
3. 予備費		0	400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
7. 次年度繰越金		0	6,513,651	
支出計	9,133,245		20,955,651	

2014年度日本地球化学会予算 (2014年1月1日～12月31日)

収入の部

科目	2014年予算額 (円)		2013年予算額 (円)	
1. 会費収入	7,990,000		8,117,000	
1.1 一般正会員		6,660,000		6,726,000
1.2.1 学生正会員		390,000		418,000
1.2.2 学生正会員(学生パック)		150,000		160,000
1.3 シニア正会員		290,000		280,000
1.4 賛助会員		180,000		200,000
1.5 在外会員		320,000		333,000
2. 刊行物売上	0		0	
3. 広告料	790,000		600,000	
3.1 地球化学		480,000		480,000
3.2 会員名簿		0		0
3.3 ウェブ		310,000		120,000
4. 出版助成	3,700,000		0	
5. 公開発表助成	0		0	
8. 雑収入	50,000		50,000	
9. 前年度名簿積立金	0		0	
10. 前年度基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
11. 前年度繰越金	10,701,141		8,788,651	
収入合計	26,631,141		20,955,651	

支出の部

科目	2014年予算額 (円)		2013年予算額 (円)	
1. 事業費小計	12,082,000		8,952,000	
1.1 出版費		8,702,000		6,102,000
1.1.1 印刷費		2,500,000		3,600,000
(GJ)		0		1,100,000
(地化)		2,500,000		2,500,000
1.1.2 編集費		4,550,000		1,350,000
(GJ)		4,300,000		1,100,000
(地化)		200,000		200,000
(ニュース/HP)		50,000		50,000
1.1.3 電子化経費		1,252,000		752,000
1.1.4 発送費		400,000		400,000
1.2 行事費		600,000		600,000
1.3 公開発表		0		0
1.4 学会賞経費		80,000		80,000
1.5 委員会活動費		200,000		200,000
1.6 広報委員会経費		200,000		150,000
1.8 会員業務委託費		1,800,000		1,800,000
1.9 会員業務郵税		20,000		20,000
1.10 国際交流費		500,000		
2. 管理費小計	1,420,000		1,640,000	
2.1 庶務費		100,000		100,000
2.2 会議費		10,000		30,000
2.3 通信費		10,000		10,000
2.4 旅費		600,000		600,000
2.6 会計費		50,000		50,000
2.7 雑費		50,000		50,000
2.8 ホームページ費用		400,000		600,000
2.9 雑誌保管費		200,000		200,000
3. 予備費	400,000		400,000	
4. 基本財産引当金	3,400,000		3,400,000	
5. GC 準備・開催基金	2,000,000			
7. 次年度繰越金	7,329,141		6,563,651	
支出計	26,631,141		6,563,651	
実収入	12,530,000		8,767,000	
実支出	15,902,000		10,992,000	
差引	-3,372,000		-2,225,000	

ただし、実収入：収入計から繰越金、基本財産引当金を除いたもの。
 ただし、実支出：支出計から繰越金、基本財産引当金を除いたもの。

学会からのお知らせ

●第8回日本地球化学会・日本鉱物科学会合同ショートコース報告書

(1) 2013年9月10日(火)につくばサイエンスインフォメーションセンターにて第8回ショートコースが開催された。本年は、日本地球化学会と日本鉱物科学会との共同開催となった。参加者数は、学生会員13名(内訳:日本地球化学会学生会員9名,日本鉱物科学会学生会員2名),非会員(主催学会の学生会員以外。ポスドク,教員を含む)11名の計24名であった。ショートコースの内容は,地球科学の広い分野をカバーする4つの学術講義と,プレゼン技術の涵養を目的とした講演1つの,計5つの講義が行われた。学術講演の講師は,橘省吾氏(北海道大学),岩森光氏(東京工業大学),井上徹氏(愛媛大学),大河内直彦氏(海洋研究開発機構)であり,それぞれ,隕石から読み取る太陽系初期の物質進化と惑星探査の重要性・面白さ,大量データがもつ高い潜在能力とその活用法,超高压物理を駆使した地球内部研究の最先端,生体研究における安定同位体手法の革新性を講演していただいた。プレゼン技術に関する講義は,Thomas Parkner氏(筑波大学)にお願いし,国際学会での口頭発表の仕方を,話し方,スライドの作り方,発表練習の重要性等を詳細かつ具体的に講義いただいた。講演時間70分にくわえ,質疑応答に10分を充てたが,参加者から多くの質疑・議論により,プログラム進行が遅延するほどであった。

会場設営,ショートコース運営等で,野尻様,向井様,木村様(いずれも日本地球化学会年会LOC),丸山様,伊藤様,岡林様,坂田様(いずれも京都大学大学院理学研究科)の支援をいただいた。ここで感謝したいと思います。

ショートコースの主旨

鉱物科学では,材料科学だけでなく,コア,マントル,地殻,表層,惑星とあらゆる空間を対象とする物質科学的切り口で発展してきた。一方で地球化学は,実験・分析技術,データ解析技術の急速な発展を背景に,得られる地球化学的知見の質と量が飛躍的に向上し,地球科学分野の発展を基盤から支える重要な学問となっている。地球化学は手法で定義され,鉱物科学は対象で定義されているという違いはあるが,両者に

共通しているのは,最近の急速な発展にともない,研究の専門化が加速し,その結果一人の研究者が分野全体を俯瞰しながら問題の本質を見抜き,その解決に向けて多角的に研究を進めることが難しくなった点である。こうした背景から,日本地球化学会では地球化学を研究する上で必須となる基礎知識の包括的修得と,最先端研究に触れることによる視点の拡大という二つの目標を掲げ,2006年から大学生・大学院生を対象とした「ショートコース」を年会日程に合わせて開催してきた。本年は,日本鉱物科学会と日本地球化学会が年会を同日合同開催(2013年9月11~13日)であることから,両分野を横断する研究者を講師として迎え,様々な研究分野での最先端の学術研究の紹介を通じて,これまでとは異なる新しい切り口から将来の研究動向を考える機会を提供したい。講師は各分野で活躍されている5名の方々に,今年も地球化学・鉱物科学の面白さが実感できる講義構成となった。さらに本年のショートコースでは,英語プレゼンテーション技術に関する講義も計画しており,学術研究知識の拡大と研究推進を支える基礎知識の包括的修得を目指した。学生だけではなく,一般の研究者の方々にとっても魅力のある講義となったので,多数ご参加をお願いしたいと思います。

講演プログラム

9:30~9:40

はじめに「Grand jete」 平田岳史(東工大)

9:40~10:50

【講演1】 鉱物の記憶—太陽系・銀河系

橘 省吾(北海道大学)

10:50~11:00 討論

11:00~12:10

【講演2】 データ時代の地球化学

岩森 光(東京工業大学)

12:10~12:20 討論

13:20~14:30

【講演3】 鉱物科学と地球深部物理学

井上 徹(愛媛大学)

14:30~14:40 討論

14:40~15:50

【講演4】 若いなら やらなきゃ損 有機物

大河内直彦(海洋研究開発機構)

15:50~16:00 討論

16:00~17:10

【講演 5】 Improving oral presentation skills

Thomas Parkner (Univ. Tsukuba)

17:10~17:20 討論

17:20~17:30 【Closing】

(2) 会計報告

収入は参加費のみである。本ショートコースの参加費は、日本地球化学会と日本鉱物科学会の学生会員が1,000円、学生会員以外・非会員が3,000円である。参加者には1,000円相当の昼食を提供するので、学生会員（日本地球化学会・日本鉱物科学会）の参加費は実質的に無料となっている。主な支出は、昼食代金に加え、講師料（一人あたり10,000円）であった。講師料は橋氏、井上氏、大河内氏、Parkner氏の4名に支払った（岩森氏は地球化学会評議員であるため講師料は支払わなかった）。これまでは昼食として弁当を配布していたが、今年では会場が飲食禁止であったため、今回は近隣のレストランにて昼食をとった（昼食費は一人あたり1,000円）。会計収支表を以下に示す（領収書コピーを添付した）。

1. 収入の部		単価	計	
1 参加費	学生会員 13名	1,000	13,000	
	非学生会員 11名	3,000	33,000	
	合計 24名			
2 学会補助				
	日本地球化学会		12,500	
	日本鉱物科学会		12,500	
			計	71,000
2. 支出の部		単価	計	
1 講師謝金*	4名	10,000	40,000	領収書有り
2 昼食代 (LOC補助員含む)**	31名	1,000	31,000	領収書有り
			計	71,000

* 橋、井上、大河内、Parkner各氏。岩森先生は評議員のため講師料を支払わず。
** 参加者24名、講師2名、LOC補助員1名の計31名。

アジレントテクノロジー社からは、参加者全員に対しボールペンとトートバッグの提供をいただいた。ここで感謝したいと思います。

(3) 来年度のショートコースに向けたアンケート結果（参加者24名中20名から解答）

- (a) 開催日程について：このままでよい（18名）、年会後（1名）、年会前後のどちらでもよい（1名）
- (b) 講演時間について：このままでよい（18名）、もう少し短く（1名）、休憩を入れて欲しい（4名）

(c) 関心のあるテーマ：物質・元素循環（3名）、英語論文の書き方（2名）、初期地球、テーマ（ジャンル）ではなく分析手法等に特化した切り口（横串）で、海洋、無水鉱物中の水、地震・火山の地球化学的観測、地下水関係、同位体地球化学、生物地球化学、マントル、鉱石・隕石等の化学的な見方、水—鉱物界面現象、年代学、スノーボールアース、変成作用による選択的濃集とそれによりできる鉱物種、小環境復元、GOE、生体鉱物、地球内部構造・物理、総合的科学的（領域横断的科学的）、惑星形成、初期地球、英語コミュニケーション関連、熱水

(d) 聞いてみたい講師：小木曾哲（京大）、木村純一（JAMSTEC）、平田岳史（京大）、川幡穂高（東大）、高井研（JAMSTEC）、小宮剛（東大）

(e) 参加費について：妥当（4名）、高い（1名）、安い（3名）、会員非会員で差別化することで会員になろうと考えるきっかけになる

(f) ショートコースに対する要望、意見等：若手会と連携できるとよりよい、今年は鉱物学会との共催だったので鉱物の話が多かったが地球物理に偏っていた、スライドを配布して欲しい、学部学生にとっては難しい（より基礎から話して欲しい）

(g) 所属学会：地球化学会学生会員（5）、鉱物科学会（4）、地球惑星連合（4）、地球化学会一般会員（2）、火山学会（1）、有機地球化学会（1）、サンゴ礁学会（1）、地質学会（1名）、非会員（3）

（京都大学大学院理学研究科・平田岳史）

●学会賞など受賞候補者推薦の募集

「柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞」
2014年度受賞候補者推薦の募集

日本地球化学会規定により、柴田賞・学会賞・奨励賞・功労賞受賞候補者の推薦を募集いたします。つきましては、下記をご参照の上、会員各位のご関係で適当と思われる受賞候補者を、自薦他薦を問わずご推薦下さいますようお願いいたします。

候補者の資格：

（柴田賞）地球化学の発展に関し、学術上顕著な功績のあった者。

(学会賞) 地球化学の分野で特に優秀な業績を取めた本会会員。

(奨励賞) 地球化学の進歩に寄与するすぐれた研究をなし、なお将来の発展を期待しうる本会会員。受賞者の年齢は、2014年4月1日において満35歳未満である(誕生日が1979年4月2日以降である)ことを要する。

(功労賞) 我が国の地球化学あるいは本会の発展に関し寄与のあった者、または団体。

募集の方法: 本会会員の推薦による。

推薦の方法: 所定用紙に記載し、2014年1月31日(木)までに庶務幹事へ提出する(消印有効)。

提出先: 鍵 裕之(総務幹事)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科 地殻化学実験施設

Phone: 03-5841-7625 or 4450

E-mail: kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

推薦の書式は、学会ホームページからダウンロードできます。

<http://www.geochem.jp/prize/index.html>

同様の書式をワープロ等で作成していただいても結構です。

この件についてのお問い合わせは、本会庶務担当幹事(上記)までお願いします。

●2014年度第1回鳥居基金助成の募集

2014年度第1回鳥居基金助成の応募の締め切りは、2014年1月31日(消印有効)となります。本学会ホームページに応募要項がありますので、ご参照の上、応募書類を提出して下さい。なお今回の助成の対象は、2014年4月から2015年3月までの1年間に実施される海外渡航及び国内研究集会となりますのでご注意ください。

<http://www.geochem.jp/prize/torii.html>

申請手続

応募者は、学会ホームページからダウンロードした申請書((1)-Aまたは(1)-B)を所定の期日までに下記に提出して下さい。参考となる資料(海外派遣については業績リストおよび学会参加の場合は学会概要等、国内研究集会については集会の案内・概要等)を

添付して下さい。なお、海外渡航により国際学会等での研究発表を行う場合は、申請書の「研究の概要・経費の支援を必要とする理由」欄に、渡航にあたっての抱負や発表する論文の内容・重要性、なぜ鳥居基金の補助を必要とするかについて記載して下さい(2012年度から様式が改訂されていますのでご注意ください)。また、海外派遣に関しては、他の研究助成金との重複受給(合算使用を含む)は認められておりませんので、ご注意ください。

提出先: 鍵 裕之(総務幹事)

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院理学系研究科 地殻化学実験施設

Phone: 03-5841-7625 or 4450

E-mail: kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp

評議員会議事録

●2013年第3回日本地球化学会評議員会議事録

日時: 2013年9月10日(火) 12:30~18:30

場所: つくばサイエンス・インフォメーションセンター 中会議室

出席者: 吉田会長, 山本副会長(途中から出席), 清水監事(オブザーバー参加), 板井, 岩森(途中一部出席), 小畑, 折橋, 川幡, 佐野(途中から出席), 下田, 高橋, 谷水(途中から出席), 谷本(途中から出席), 角皆, 原田, 日高, 平田(一部出席), 益田, 丸岡, 南, 横山, 豊田の各評議員

欠席者: 植松評議員, 塚本評議員

1. 審議事項

1.1. 第2回評議員会(メール会議)議事録の確認

1.2. Geochemical Society (GS) および European Association of Geochemistry (EAG) との MOU 締結について

会長から本会と GS, 本会と EAG が相互交流を深め, Goldschmidt Conference (GC) を発展させる努力を継続することを謳った MOU 文案について説明があり, 承認された。本年12月に San Francisco で開催される American Geophysical Union (AGU) Fall Meeting の際に調印される。

1.3. Goldschmidt Conference (GC) 2016年日本開催について

益田 GC 幹事・準備委員会 (LOC) 委員長から国内関連学協会に対する会長・準備委員会委員長名での協力要請文書についての説明、および LOC と GS との間で締結予定の MOU 文案についての説明があり、承認された。後者については、GC 2016 開催に伴う収益・損失の取り扱いに関して GS と本会の間で今後見解の相違が生じる可能性があるため、MOU を尊重しつつ相互の意思疎通を深め、柔軟に対処する方針を確認した。

1.4. 2012年度決算, 2013年度中間報告, 2013年度予算

南会計幹事からそれぞれについて説明され、2012 年度決算および2013年度中間報告が承認された。

2012年度会計は、一部会員の納入延滞により会費収入が予算額を若干下回ったものの、広告料収入および雑収入(「地球と宇宙の化学事典」の印税、過去の年会 LOC からの準備金返却等)が増加したため、全体の収入は予算額を上回った。支出は行事費、会員業務委託費が削減できたが、印刷費、発送費が若干増加した。結果として基本財産引当金、繰越金を除いた実支出は実収入を約70万円上回った。2013年度は、科研費国際情報発信強化 B (GJ 助成) および研究成果公開促進費(市民講演会助成)の採択により収入が当初予算より増加、支出はほぼ順調に推移している。

2014年度予算については、(1)Geochemical Journal (GJ) 予算を50万円増額して会員によるオープンアクセス論文投稿費を助成する、(2)GC 2016 LOC へ貸し付ける200万円を計上する(GC 基金に組み入れる)、の2点の修正を経た上で承認された。

1.5. 総会式次第について

議事次第、2012年度事業報告、2013年度中間報告、2014年度事業計画が承認された。

1.6. 次期評議員会への引き継ぎ事項について

1.6.1. 前期(2010~2011年度)評議員会から今期(2012~2013年度)評議員会へ引き継がれた事項への対応結果について審議し、以下の通り決定した。

(1)IAGC(国際地球化学連合)や Geochemical Society (米国)地球化学会、European Association of Geochemistry(欧州地球化学連合)、Chinese Society of Mineralogy, Petrology and Geochemistry(中国鉱物岩石地球化学会)との連携を一層強化し、国際的交流を通して会の活動をより一層活性化

して欲しい。

—————中国鉱物岩石地球化学会とは MOU を締結した。GS, EAG とも近々 MOU 締結予定。

(2)Goldschmidt Conference における本学会の立場(主催3団体の1つ)を堅持して欲しい。GJ 賞の授賞式、ブース展示、参加登録費の割引を引き続き継続して欲しい。Goldschmidt Conference での GJ 賞の授賞に併せて、授賞レクチャーをプログラムに組み入れてもらうようにして欲しい。Goldschmidt Conference のプログラム委員に地球化学会会員を積極的に推薦して欲しい。

—————上記すべてを実施、達成した。主催3団体という認識は以前からなく、2つの Co-owners の次の第3番目の団体 Principal Co-sponsor という位置づけに変わりがないことを確認した。さらに2016年の日本開催が決定し、準備委員会を設置して準備を進めている。

(3)Geochemical Journal の将来的展望を引き続き議論し、会の財政と整合させつつ、論文誌としての発展を期して欲しい。

—————2013年から出版・販売権をテラパブに移譲して印刷経費を削減し、会の財政との整合を図った。さらに、新たに採択された科研費を利用してオープンアクセスの電子ジャーナル化に向けての取り組みを開始した。

(4)日本地球惑星科学連合、日本化学連合との関係を適宜見直し、地球化学会のプレゼンスを高めて欲しい。

—————日本地球惑星科学連合には代議員を多数推薦し、連合大会でのセッション運営など積極的に関与した。日本化学連合については、関連会議には代表が出席した。

(5)地球化学会の活動が広く会員の利益に叶っているかどうかを常に考えて欲しい。

—————会員の利益を考えて種々の活動を行ってきた。より細やかな希望聴取とそれに沿った活動の実施が大切と考える。

「検討事項」

(1)JSPS 育志賞、文科省科学技術分野の文部科学大臣表彰受賞候補者、若手科学賞受賞候補者などの推薦依頼をどうあつかうかを明確に決める。

—————応募締切2週間前を目途に会員から候補者を募り、会長と副会長が審議して学会推薦の候補

者を決めることとした。しかし、これまでのところは会員からの立候補・推薦がない。

(2)地球惑星連合大会プログラム委員を他の一連の委員とともに、会期の初めにきめておく。プログラム委員の任期は1年だが、2年任期とすると好都合。評議員の中から選ぶ場合、2年間は評議員から外れることもあるが、評議員である必要はないので、問題にならない。

——委員3名を会員から選び、3年任期、1名が毎年交代となるようにする。毎年第1回評議員会(2月)にて承認する。

1.6.2. 今期評議員会から次期(2014~2015年度)評議員会への申し送り事項について審議し、以下の通り決定した。

(1)Geochemical Society ((米国)地球化学会), European Association of Geochemistry (欧州地球化学連合), Chinese Society of Mineralogy, Petrology and Geochemistry (中国鉱物岩石地球化学会)とのMOUをもとに、具体的な国際的交流を通して会の活動をより一層活性化して欲しい。

(2)IAGC (国際地球化学連合), アジア・オセアニアの地球化学会との連携を強化し、MOUを結ぶよう努力して欲しい。

(3)Goldschmidt ConferenceにおいてGS, EAGに次ぐ第3番目のPrincipal Co-sponsorという本学会の立場に変わりがないことを確認し、GJ賞の授賞式・受賞講演, ブース展示, 参加登録費の割引を継続して欲しい。Goldschmidt ConferenceのCo-convenorに地球化学会会員が積極的に立候補するよう働きかけて欲しい。

(4)Goldschmidt Conference 2014時にGS Board memberとして日本地球化学会より1名を選出する。そのメンバーはThe Goldschmidt Forumの委員としても機能するので積極的に要請を受けてほしい。

(5)Goldschmidt Conference 2016の成功に向けて日本地球化学会は準備委員会のコアメンバーを選出した。準備委員会および将来組織される組織委員会(LOC)はその活動予定を地球化学会に諮り、評議員会で決定する。素早い活動が必要な場合は事後承諾でも良いものとする。このように本会の責任の下で、LOCがスムーズに活動できるようにしてほしい。

(6)Geochemical Journalおよび和文誌「地球化

学」の将来的展望を引き続き議論する場を設定し、会員への利便供与についても十分議論し、論文誌としての発展を期して欲しい。

(7)日本地球惑星科学連合, 日本化学連合との関係を短期・長期的視点で適宜見直し, 地球化学会のプレゼンスを高めて欲しい。

(8)幹事会の構成と各幹事の役割分担について見直しを行ってほしい。

(9)大型研究計画や2040年に至る研究の夢ロードマップなどについて継続的に議論し, より良い提案をしてほしい。

1.7. 次期学会賞等選考委員および鳥居基金委員の選出について

投票により学会賞等選考委員(任期2年)2名および鳥居基金委員(任期3年)1名がそれぞれ改選された。

1.8. 地学オリンピック日本委員会への活動支援について

地学オリンピック日本委員会の活動支援要請に対し, 本会が協賛団体として協賛することが承認された(協賛金5万円)。また, 地学オリンピック予選および本選の問題作成への協力依頼に対して, 本会から作成委員を派遣することを承認した。また, これまで地学オリンピック担当委員を務めた丸岡評議員が今季限りで退任し, 次期評議員会にて次の委員を決定することとした。

1.9. 日本地球惑星科学連合(JpGU)男女共同参画委員について

JpGU男女共同参画委員会はアウトリーチに関する情報共有を主な目的とし, 年3回程程度の会合(うち1回は連合大会時, 他はメール会議)が開かれ, イクメンプロジェクト企画, 女子高生対象夏の学校への講師派遣などを行っている。本会から派遣すべき委員が, 2010年から欠員となっていたため, 来年5月から任期2年の委員とし, 次期評議員会にて選出し会長が委嘱することとした。

1.10. 「今後の宇宙開発体制のあり方に関するタスクフォース会合・リモートセンシング分科会」が設置したTFコミュニティの提言書および連絡担当者について

TFコミュニティ提言書案について特段の意見は出なかった。連絡担当者を谷本浩志会員に依頼した。

1.11. 役員選挙細則について

第7条の「副会長の選挙は2名連記無記名投票とする」および「評議員の選挙は20名連記無記名投票とする」について、記名数がそれぞれ1名、19名以下の票も有効であることを明確にするためそれぞれ、「2名不完全連記無記名投票」および「20名不完全連記無記名投票」と改正する案が豊田評議員から提出され、承認された。また、第6条(1)で規定されている、会長・副会長・監事選挙における得票同数の場合の選出方法が同(2)の評議員選挙の場合と異なる点について、次期評議員会において改正の是非を議論することとした。併せて高橋選挙管理委員長から出された、投票率向上のための投票用紙の改訂案についても、次期評議員会が早期に選挙管理委員会を発足させて検討していくこととした。

2. 報告事項等

2.1. 役員および評議員の選挙結果（高橋選挙管理委員長）

2013年9月3日 13:00~16:30に高橋委員長、谷水委員により開票が行われた。投票数は175であった。

会長：当選 川幡穂高157票、次点 山本鋼志2票、1票得票者3名、白票13

副会長：当選 野尻幸宏144票、山本鋼志135票、次点 高橋嘉夫3票、1票得票者7名、白票59、無効2票

監事：当選 清水洋157票、次点 石橋純一郎1票、鍵裕之1票、白票15、無効1票

評議員：当選 平田岳史136票、坂本尚義118票、原田尚美117票、角皆潤115票、鍵裕之114票、石橋純一郎112票、鈴木勝彦112票、南雅代110票、小畑元109票、日高洋109票、益田晴恵109票、佐野有司108票、奈良岡浩101票、岩森光97票、川口慎介94票、大河内直彦90票、山岡香子81票、折橋裕二77票、藪田ひかる77票、寺田健太郎73票、次点 三村耕一71票、渡邊剛71票、67票以下の得票者の総得票数289、白票1008、無効2票

2.2. 庶務（豊田幹事）

2.2.1. 幹事会

第3回幹事会（9月7日(土) 13:00~18:10、東工大岡山キャンパス西9号館）

出席者：吉田会長、山本副会長、坂本・GJ編集

委員長、高橋・和文誌編集委員長、川幡、下田、平田、益田（13:30から出席）、南、豊田の各幹事、欠席者：原田幹事

第3回評議員会の議案整理を行った。

2.2.2. 年会関連

日本化学会、日本分析化学会、日本地質学会、日本質量分析学会、日本鉱物科学会に共催依頼し、承認された。日本化学会と日本地質学会にはメールニュースによる広報を依頼した。中国鉱物岩石地球化学会 Hu 会長、Liu 前会長招聘のための事務手続きを行った。名誉会員へ招待状を発送した。学会賞等受賞者への講演依頼およびメダル、賞状の手配を行った。昨年は選考に漏れた候補者（の推薦者）には通知しなかったが、今後は会長名で庶務幹事から通知することとする。

2.2.3. 学会賞、鳥居基金

GJ賞の盾、賞状を手配した。GC 2013授賞式にて会長から宗林会員に盾、賞状、副賞目録が授与された。共著者分の賞状には郵送で宗林会員に送付予定。鳥居基金（第2回、7月末締切）には海外渡航2件の応募があった。

2.2.4. 広告

本年度年会会場にて、出展企業に和文誌、HP 広告掲載依頼をする。

2.2.5. その他

日本化学連合 正会員学協会 会長会に山本副会長とともに出席した（8月29日 11:00~13:30、化学会館）。

2.3. 広報（原田幹事）

2.3.1. 学会ホームページ

国際文献に依頼し、改訂を実施。トップページの新着にサムネイル写真を用い、見やすく改訂。また、トップページ上部には会員から寄せられた写真をスライドショーで見せている。随時、新しい写真を受付中。情報のアップロードについては、17800円/月で国際文献と年間契約（サムネイル写真のアップロード分が増えたため前年より1000円/月の増加）。現在ウェブ広告は3件（テラパブ、三洋貿易、PTT株式会社）。

2.3.2. 講師派遣事業

2013年8月現在の派遣講師登録は48名。今年度の派遣実績は4件（広尾学園中学校・高等学校（東京都）：丸岡照幸会員、3/20、久喜市立久喜中学校（埼

玉県)：瀧上豊会員，5/29，吉野小学校(福井県)：山本鋼志会員，6/21，鈴峯女子中・高等学校(広島県)：高橋嘉夫会員，6/22)。

2.3.3. 展示ブース

JpGU大会では，地球化学ならびにGJのバックナンバー，GJ-CD，パンフレット，ノベルティの展示または配布，2014年年会，ショートコース，若手会集会の紹介ポスター掲示，学会員が著者となっている書籍(最大56%引き割引価格や付録付きで販売)，「地球と宇宙の化学事典」の販売を行った。Goldschmidt 201ではGJバックナンバー，GJ-CD，パンフレット，ノベルティの展示または配布，ならびにGoldschmidt Conference 2016横浜のポスター掲示，横浜紹介関連パンフレット，give away配布を行った。

2.3.4. つくば年会のプレス対応

各コンピーナーにハイライトの発表の推薦依頼した。J1(地球外物質)およびG18(原発事故)に関しては特に関心が高いことから，セッション全体の概要をまとめ，先行して発表内容の要約をマスコミ各社にファックス送信した。他のセッションのハイライト講演の情報はまとめてマスコミ各社にファックス送信した。

2.4. 会員(下田幹事)

5月から8月までの会勢は以下の通り。

日本地球化学会会員数(2013年8月31日)

会員種別	人数	契約口数	GJ冊子希望
一般正会員	738		64
学生正会員	138		6
うち，学生バック	(53)		(2)
シニア正会員	60		8
賛助会員	9	9	2
名誉会員	10		1
合計	955		83

会員異動(2013/5/1~2013/8/31)

【入会】

(5月)

会員番号	会員名	会員種別
9282263	堀 まゆみ	学生バック
9282849	工藤久志	学生正会員
9282852	小池みずほ	学生バック
9282855	加藤千恵	学生バック
9282856	田中雅人	一般正会員

9282857	西崎 遼	学生バック
9282858	奥井 航	学生バック
9282861	新井達之	学生バック
9282862	青山慎之介	学生バック
9282863	廣瀬正明	学生バック
9282864	大原 信	一般正会員
9282865	Adebanjo J. Anifowose	学生正会員
9282866	Chikumbusko Chiziwa Kaonga	学生正会員
	(6月)	
9282868	正木翔太	学生バック
	(7月)	
9282873	西田 梢	一般正会員
9282874	癸生川陽子	一般正会員
9282887	山本伸次	一般正会員
9282881	田島義之	学生正会員
9282871	早田 葵	学生正会員
9282264	富安史也	学生バック
9282859	佐藤峰南	学生バック
9282879	石輪健樹	学生バック
9282880	山下陽平	学生バック
9282885	高橋 稔	学生バック
9282891	養田太一	学生バック
	(8月)	
5282265	ダニエラチェ セバスチアン	一般正会員
9282869	風早竜之介	一般正会員
9282875	藤原将智	一般正会員
9282882	金井啓通	学生正会員
9282896	佐藤知紘	学生正会員
9282870	外山浩太郎	学生バック
9282872	近藤 望	学生バック
9282877	小坂由紀子	学生バック
9282883	田中崇史	学生バック
9282884	鐵 智美	学生バック
9282886	谷口無我	学生バック
9282889	菅 大暉	学生バック
9282892	藤本 潤	学生バック
9282895	安藤卓人	学生バック

【退会】

(5月)

会員番号	会員名	会員種別
6281021	佐藤 純	シニア正会員 逝去
	(6月)	
	なし	

- (7月) なし
(8月) なし

【会員種別変更】

(5月)

会員番号	会員名	変更前	変更後
9282662	横山由佳	学生正会員	一般正会員

(6月)

9282347	松中哲也	学生正会員	一般正会員
9282529	山口保彦	学生正会員	一般正会員
9282767	坂本祐樹	学生正会員	一般正会員

(7月)

7280928	渡辺康憲	一般正会員	シニア正会員
9282405	山根雅子	学生正会員	一般正会員
9282548	楠野葉瑠香	学生正会員	一般正会員
9282669	太田祥宏	学生正会員	一般正会員
9282743	小原北士	学生正会員	一般正会員

(8月)

9282685	森島 唯	学生正会員	一般正会員
---------	------	-------	-------

2.5. 和文誌「地球化学」(高橋編集委員長)

2.5.1. 編集長交代

2014年1月より小木曾哲会員(京都大)に交代する。編集委員会は次期編集委員長が中心となって編成予定。

2.5.2. 発行状況

Vol. 47, No. 3 (日本地球化学会60周年記念号)を発行した。No. 4は以下の内容で年内発行予定(GJ Vol. 47, No. 4と同梱)。(1)日本地球化学会奨励賞(2012)受賞記念論文:澁谷岳造,「初期地球の海底熱水系に関する地質学的,地球化学的研究」,(2)日本地球化学会賞(2012)受賞記念論文:杉浦直治,「隕石母天体の集積の歴史を明らかにする試み」(査読中),(3)日本地球化学会奨励賞(2009)受賞記念論文:飯塚毅,「 hafnium及びタングステン同位体から読み解く初期地殻進化」(査読中),(4)企画総説「地球化学の最前線」:天知誠吾(原稿待ち),(5)報文:土岐知弘ほか,「熊野泥火山における間隙水の起源」,(6)博士論文抄録:東田盛善「南西諸島の天然水の起源および水質形成に関する地球化学的研究」,(7)博士論文抄録:橋口未奈子「炭素質コンドライト隕石中の同位体異常をもつ有機物の水素・窒素同位体組成と産状」。

*この他,報文2編が査読中。

2.5.3. 未投稿の受賞記念論文(過去10年以内)

学会賞:横内陽子(投稿予定),吉田尚弘(投稿予定),南川雅男(投稿予定),長尾敬介,海老原充,塚本尚義 奨励賞:長島佳菜(投稿予定),川口慎介,黒田潤一郎,西澤学(投稿予定),関宰

2.5.4. 地球化学誌の最近4年間(2010~013年)の活動総括

(1)企画総説「地球化学の最前線」の連載開始,(2)特集号を企画(「有機物・微生物・生態系の地球化学」,「アストロバイオロジー」,「東日本大震災から1年」,「地殻流体」,「60周年記念号」),(3)CiNiiでの創刊号以降の全文公開開始,(4)予算削減の努力(部数1000部に削減,編集費20万円に減額,カラーチャージ価格表明示),(5)2013年より表紙刷新,(6)編集長交代のプロセスの明文化

2.5.5. 地球化学誌の今後について

数名の会員から寄せられた和文誌の在り方についての批判を踏まえ,以下を提案し,年会期間に開催される夜間集会でも議論する。(1)投稿を主とする和文誌の役割が小さくなってきたので,依頼原稿の割合を増やす。ただし編集委員の負担が増すこと,投稿の場を残しておいて欲しいという声にも留意。(2)ニュースの中の会員交流記事との棲み分けを再検討する。(3)印刷会社の再選定。(4)特集号の表紙を差別化できるようになったので活用する。

この報告に対し,次期評議員会において運営委員会を設置して検討するのがよいのではないかと,との意見が出された。

2.6. GJ(塚本編集委員長)

2.6.1. 発行・編集状況

2013年 Vol. 47, No. 3は6月に, No. 4は8月に発行された。9月1日現在の投稿数は238報,うち受理79(44%),却下100(56%),審査中57,取り下げ2となっている。特集号は,第58回年会「水圏環境地球化学—佐竹洋先生記念シンポジウム」に基づく特集号(富山大・張会員)を年内発行予定, Goldschmidt 2013 “Refractory Grains, Volatiles, and Organic Molecules Inherited from the Interstellar Medium”に基づく特集号(Lydie Bonal, Shogo Tachibana, Henner Busemann)を予定している。

2.6.2. その他

Geochemical Journal Awards 2013の授賞式・受賞講演がゴールドシュミット会議で行われた。会場

はほぼ満席であった。Open Access 論文公示と取扱を開始した。今年中に出版と同時に DOI 取得可能とする予定で鍵副編集長と作業を進めている（テラパブが JSTAGE に論文をアップロードすることにより取得する）。科研費にて編集事務を行う非常勤職員 1 名を 9 月より雇用した。

2.7. Goldschmidt Conference (GC) (益田幹事)

2.7.1. 5 月 25 日以降の GC 2016 組織準備委員会の活動

(1) Geochemical Society (GS) との合意文書に関するメール会議を 6 月上旬までに行い、修正を行った。(2) 6 月 17 日にワシントン D. C. のカーネギー研究所にて、GS の会長である Dr. Rick Carlson と合意文書の内容について協議した。日本地球化学会からのこの会合への参加者は、吉田会長、益田幹事兼準備委員会 (LOC) 委員長、山下勝行会員 (LOC 国際担当委員) の 3 名。(3) 6 月の合意文書に関して 7 月下旬から 8 月上旬にかけて、再度メール審議を行い、微修正後に承認を得た。(4) GC 2013 の開催期間中に以下の公式・非公式行事を行った。8 月 25 日：拡大 LOC 委員会を開催した (公式)。会期中に会場や運営に関する観察事項についての感想文を川幡 LOC 委員まで送付することを依頼した。また、中国との連携を踏むために Indiana University の Dr. Cheng Zhu の紹介が行われた。8 月 28 日：ケンブリッジパブリケーションの Dr. Paul Beattie による GC 2016 に関する企画提案の説明。当日配布された資料を改訂して 9 月中旬までに見積書を作成して送付されることとなった。8 月 28 日：GS の会長である Dr. Rick Carlson と合意文書に署名した。その他：初日の GS board meeting と EAG-GS meeting, 最終日の Lunch Party で吉田会長が GC 2016 の紹介を行った。また、GC 2014 (来年度のサクラメントでの会議) のプログラム委員会および運営委員会へオブザーバー参加した。

2.7.2. 今後の予定 (おおむね年内くらいに予定しているもの)

(1) ケンブリッジパブリケーションとの契約 (時期は未定), (2) プログラム委員会のコーディネーター (セッション提案者) と、その他委員会の実務委員の推薦, (3) 日本学術会議と日本学術振興会への会議開催支援申請書の作成, (4) 国内と国際の関連学会への協力要請, (5) 旅行代理店の選定 (現在、コンベンションリンクページによって作業進行中)。

2.8. 企画 (平田幹事)

2.8.1. Goldschmidt Conference 2013

8 月 25～30 日にイタリア・フィレンツェにて開催された。参加登録者は約 4200 名。地球化学会として協賛金 (5,000 ドル) を支援。日本地球化学会会員は登録費が 50€ 割引となった。Plenary Lecture の会場にて Goldschmidt Medal, Shen-su Sun Award, Urey Medal, Patterson Award, Houtermans Medal, The Geochemical Journal Award の授賞紹介があった。また GJ アワード授与式と受賞記念講演も開催された。

2.8.2. 日本地球化学会第 60 回年会および関連行事

9 月 11～13 日に筑波大学第一エリア 1D 棟, 1E 棟 (鉱物科学会は 1B 棟, 1C 棟) にて開催予定。実行委員長は野尻幸宏会員。今年は日本鉱物科学会との共同開催となった。年会での発表形式は今年もセッション制がとられ、「共通セッション」(日本地球化学会と日本鉱物科学会の共通セッション) が 4, 「学会基盤セッション」(評議員が中心となりとりまとめたもの) が 18, 「特別セッション」(一般公募したもの) が 2, 計 24 セッションとなった。発表数は、受賞講演 (総会後の受賞講演会) 5 件 (昨年度奨励賞受賞の澁谷氏の発表も含む), 口頭発表 160 件, ポスター発表 87 件の全 252 件となった。今年も学生賞を開設し、最終日にクロージング・セレモニーを開催し学生に発表賞を授与することとなった。年会前日 (9 月 10 日) に 5 つの講演から成るショートコースを開催, 参加登録は 26 名 (うち 1 名が鉱物科学会からの参加)。年会翌日 (9 月 14 日) に一般市民講演会「東京電力福島第一原子力発電所事故による放射性物質汚染」をノバホールにて開催予定。

2.8.3. 日本地球化学会第 61 回年会の予定

来年度の年会は 9 月 17 日 (水)～19 日 (金) に富山大学にて開催予定 (実行委員長：は張勁会員)。地球化学会 60 周年記念行事として、9 月 15 日 (月・祝日) に日中地球化学フォーラム (仮題) を計画。9 月 16 日 (火) に第 9 回ショートコースを予定。

2.8.4. その他

日本分析科学機器展示会 (JASIS@幕張) にて 9 月 4 日に第 1 回レーザーワークショップ (レーザーアブレーション分光分析研究会主催, 日本地球化学会・日本質量分析化学会後援), 9 月 5 日にイメージング質量分析のワークショップ (日本質量分析学

会主催)が開催され、いずれも100名を超える参加者があった。会場が無料であり、なおかつ最先端の分析機器に関するセミナーが並行して開催されていることから、地球化学会としても活用の可能性を検討したい。

2.9. ニュース (川幡幹事)

メールニュースはこの2年間、特に問題となる投稿はなかったため、投稿希望者が直接メールニュースを配信できるような仕組みに改め、ニュース幹事の仕事を軽減してはどうかとの提案があり、次期評議員会にて検討することとした。

2.10. 鳥居基金委員会 (下田委員長)

海外渡航について2件の応募があった(中田亮一会員、飯塚理子会員)。いずれも「学会、野外調査等に参加し、論文発表、あるいは重要な用務に従事するなど目的が明らかであるもの」との要件を満たし、申請者の研究能力が高く、学会に対して今後大きな貢献が期待できることから採択とする。

2.11. その他

JpGU 代議員選挙(候補者受付締め切り9/12)に本会会員が立候補または候補者として推薦されるよう働きかけ、候補者が出そろったら改めて本会会員をリストアップしてメールニュースで情報提供し、会員へ投票を呼びかけることとする。

(庶務幹事・豊田 栄)

●2013年第4回日本地球化学会評議員会議事録

日時: 2013年9月13日(金) 12:15~12:45, 12:45~13:10 (次期役員・評議員のみ)

場所: 筑波大学 第一エリア1E棟205号室

出席者: 吉田会長, 山本副会長*, 板井, 岩森*, 植松, 小畑*, 折橋*, 川幡*, 佐野*, 下田, 高橋, 谷水, 谷本, 角皆*, 平田*, 日高*, 丸岡, 南*, 塚本*, 横山, 豊田の各評議員, 野尻次期副会長, 石橋, 鍵, 川口, 鈴木, 寺田, 奈良岡, 藪田, 山岡の各次期評議員, 清水監事* (オブザーバー参加)

欠席者: 原田*, 益田評議員*, 大河内次期評議員 (*次期も引き続き役員または評議員)

審議事項

1. 次期評議員会への引き継ぎ事項について

1.1. 前期(2010~2011年度)評議員会から今期(2012~2013年度)評議員会への申し送り事項について

吉田会長より総括がなされた(内容は第3回評議員会議事録に掲載)。項目2の「第3番目の団体」は本会が唯一の団体である現状を確認した。

1.2. 今期評議員会から次期(2014~2015年度)評議員会への申し送り事項について

吉田会長より説明された(内容は第3回評議員会議事録に掲載)。

2. 次期役員・評議員のみによる審議

2.1. 2014~2015年度評議員会における議論ポリシーについて

川幡次期会長より、以下の議論ポリシーが提案され、承認された。

1. 学問の振興+公平・公正
2. ボランティア活動
3. 学会員のための活動
4. Goldschmidt Conferenceの成功への努力

2.2. 2014~2015年度評議員会の活動内容について

川幡次期会長より、以下の活動内容が提案され、承認された。

1. 評議員総事務処理の簡素化(>20%)

山本副会長が中心となり、年末までに具体案をまとめる。

2. 「2040年にいたる研究の夢ロードマップ」の作成(長期)

2014年度年会で会場を1つ多くして意見発表、集約を行う。Task Force (TF) チーフを平田評議員が務める。

3. 「学術大型研究計画への提案準備資料」の作成(短期)

2014年度年会で会場を1つ多くして意見発表、集約を行う。TF チーフを高橋嘉夫会員が務める。

4. 「地球化学研究の現状と将来」の作成(中期)

地球電磁気・地球惑星圏学会(SGEPSS)の発行物を参考に、各々機関の「中期計画」などをもとに、フォーマットに準じて執筆する。TF チーフを鍵評議員が務める。

5. 来年度の年会中の9月16日(水)にTFなどについて日本地球化学会の会員の声を聞くためのシンポジウムが開催されるかもしれない。予定については、今後評議員会と年会の担当者と検討することとなった。

(庶務幹事・豊田 栄, 次期庶務幹事・山岡香子)

研究集会報告とお知らせ

●2013年度第1回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-75)

氏名 (所属) : 岩本洋子 (金沢大学環日本海域環境研究センター)

助成 : 海外渡航 (イタリア)

課題 : Goldschmidt 2013参加報告

本文 :

この度、「鳥居基金」より渡航費用の一部を援助いただき、Goldschmidt 2013に参加した。会議は2013年8月25日から30日までの6日間、イタリア・フィレンツェの中心部にある16世紀に建設された要塞 (現在は国際会議場として利用されている) を会場として行われた。地球化学の分野を網羅する本会議では、4000件を超える発表があり、セッションは24に細分化されていた。

筆者は、大気エアロゾルを扱うセッションである“*Atmospheric Aerosol in Air Quality and Climate: the Science and Solutions*”において、「能登半島で連続計測した大気エアロゾルの雲凝結核能」についてポスター発表を行った。開催地がヨーロッパであったこともあり、アジア域における大気観測に関する発表が少ないのは残念であったが、招待講演者として著名な研究者が顔を揃え、口頭発表では聴き応えのある講演が続いた。ここでは、本会議で得た大気エアロゾルに関する最近の研究動向を報告する。

【有機エアロゾル】オンラインのエアロゾル質量分析計 (AMS) が汎用化されて以来、有機エアロゾルの観測データに関しては、多地点における相互比較や、数値モデルへのインプットが精力的に進められている。一方、AMSでは分からない有機物の分子レベルの情報や発生源の情報を得るため、核磁気共鳴や炭素同位体分析を用いたオフライン分析も重宝されていた。

【個別粒子分析】顕微鏡を用いた個別粒子分析は、エアロゾル粒子を視覚的に捉えられる唯一の手法である。従来と比べ迅速な分析が可能になったことに加え、画像処理や元素分析の方法も多岐にわたり、将来はより重要な分析ツールになると感じた。

【ダスト】砂漠起源のダストのみならず、アイスランドやアリューシャン列島での大規模な火山噴火もあって、火山性ダストの注目度が高まっている。ダストの鉱物組成や鉄のスペシエーションが、それぞれ大気中でのダストの水晶核能や海洋に沈着した際の鉄 (海洋

生物の栄養塩) の溶出率を大きく左右するといった発表があった。

【生物圏と大気圏の相互作用】森林生態系から放出される有機ガスを起源とした二次有機エアロゾルや、バクテリアなどのバイオエアロゾルが雲核として働き、森林における降水過程に影響を与えることが観測により明らかになった。数値モデル研究においても、森林や海洋など生物圏を起源としたエアロゾルが気候に与える影響を評価するものが目立った。

観測研究では、商品化された装置を用いることが主流になりつつある。世界各地で同じ手法で採ったデータは、数値モデルの精緻化という観点では好都合かもしれない。しかし、少なくとも筆者の考えでは、観測研究の全てがその流れに乗ることが最善とは思えない。Goldschmidt 2013への参加を通して、新しく面白い知見を得るためには、新しい観測・化学分析手法への挑戦が必要だと強く感じた。最後になりましたが、本会議への渡航費用を助成してくださった日本地球化学会に対して謝意を表します。

(提出日 : 2013年9月30日)

●2013年度第1回「鳥居基金」助成実施報告 (TE-76)

氏名 (所属) : 三輪一爾 (東京大学新領域創成科学科 自然環境学専攻)

助成 : 国内研究集会

課題 : 日本地球化学若手シンポジウム2013

本文 :

本年度の地球化学若手シンポジウムは、埼玉県草加市にある埼玉屋旅館にて9/14~9/15に開催されました。本シンポジウム開催にあたり、北は北海道大学から南は九州大学まで計16名の学生の参加申し込みがありました (内3名欠席)。シンポジウム当日は、各人、ポスター発表や口頭発表を通して熱い議論を交わしました。招待講演には、川口慎介さん (海洋研究開発機構)、坂口綾さん (広島大学)、山川茜さん (国立環境研究所) の3名の講師の方々が引き受けてくださりました。講師の方を交えてのパネルディスカッションも行いました。

本年度の参加者の特徴としまして、年の若い参加者が多かったということがあげられます。参加者の内訳が、修士1年が7人、修士2年が4人、博士2年が2人で、そのうち半分以上が初参加でした。招待講演の内容は、若い層が多いということ意識して、研究者として大切なことについてや、講師の方が研究者に至



集合写真

るまでの経緯について多く講演していただきました。講演の内容はどの方もとても素晴らしく、参加してくれた全員にとってとても有意義なものになったと思います。パネルディスカッションでは、参加者全員から講師の方に対する質問を提出していただき、司会進行役が質問を選び講師の方に答えてもらうという形式で行いました。

今回のシンポジウムは、今後の地球化学の領域において、お互いに刺激し合えるような新たなコミュニティを形成するきっかけの一端を担えたのではないかと思います。

開催にあたり、準備段階から多くの方に多大な支援をしていただきました。シンポジウムの準備から開催まで、前年の幹事様には大変お世話になりました。参加者集めでは、学会メーリスを二度も回していただきました。また、各大学の先輩方には、参加者集めの手伝いをしていただいたり、開催にあたってのアドバイスをいただきました。これらの方々には大変感謝しております。本当にありがとうございました。来年度もこのような素晴らしい会を開催できたらよいと思っております。

最後になりましたが、本シンポジウムは鳥居基金の助成によって実行することができました。誠にありがとうございました。



書評

「海はどうしてできたのか」

(藤岡換太郎著、講談社、ブルーバックス、
2013年2月発行、205ページ、¥820)

地球の創世以来、現在に至るまでの46億年にも及ぶ歴史は、海の誕生とその変遷史とは切っても切れない密接な関係にある。本書は、海がどのようにして原始地球の上に形成され、いかに多くの変遷を経て進化し、生命をはぐくみ、現在われわれが目にしてる海にまで到達したのかの総まとめである。気の遠くなるような悠久スケールの物語でありながら、まったく退屈せず一気に読み通すことができるのは、著者の海洋地質学者としての豊かな知識と経験が随所に活かされ、最新の研究成果も巧みに織り込められ、何よりもそれらがわかりやすい言葉で綴られているためであろう。

本書の最大の特徴は、地球46億年の歴史を、天体物理学者のカール・セーガンや地質学者ドン・アイヒラーにならい「地球カレンダー」の上にあてはめて記載したことにある。すなわち、地球の歴史を1年間365日に置き換える。地球の誕生が1月1日、そして現在を大晦日の最後として、これまでに地球や海洋で起こった出来事を日付に置き換える。海の形成が2月9日、生命の誕生が2月25日、真核生物の発生は7月10日、恐竜の絶滅が12月26日……のごとくである。専門

家以外には、長すぎてイメージしづらい地球の歴史を、感覚的にわかりやすい1年間という時間スケールに置き換える手法はきわめて効果的で、海を進化させた重要な出来事やそれらの前後関係が、すっきりと整理されて頭の中に入ってくる。

本書は、同じブルーバックスにすでに上梓された「山はどうしてできるのか」の姉妹編で、両者を合わせて読むことによって、最先端の地球科学を海と陸の双方から楽しむことができるのであろう。著者の博識に裏付けられた独特で息もつかせぬ語り口や、さりげなく織り交ぜられた本音や冗談が、本書をいっそう親しみやすくしている。詳しい索引も、本書を読み返すのに大変役立つ。なお私が読んでいるのは本書の初版であるが、いくつか散見された誤植やミスが第二版で

は訂正されているとのことである。

私にとって特に印象に残ったのは、5月31日に起こったシアノバクテリアによる酸素の発生を「現在の人類もかなわない環境破壊ぶり」と表現している箇所（本書80～81ページ）である。絶妙に的を射ている。当時の海洋を支配していた嫌気性生物にとって猛毒でしかない酸素の大量ばらまきは、確かに地球史上最大の「海洋汚染」と見なすにふさわしい。しかしこの酸素が、多くの嫌気性生物を死滅させた一方で、酸素を積極的に使うことのできる真核生物の発生を促したところに歴史の面白さがある。「シアノバクテリアこそは地球生物最大のスーパースター」と著者は述べている。（蒲生俊敬）

<ニュースについて>

日本地球化学会の会務を来期整理していきたいと考えています。現在、評議員会および幹事会で議論されている内容の要約をお伝えします。

1. 現在メールニュースはニュース幹事が配信していますが、各会員が直接ニュースを流せるように設定できないか、検討しています。2年間のメールニュースを配信してきましたが、問題となるような内容は1つもなく、自由投稿を実施している他の学会においても特に問題が起こっていないというのが現状です。今後のスケジュールとしては、2014年2月の評議員会で議論して、認められれば、2014年3月末までは従来の配信と自由投稿を併行させ、4月以降自由投稿のみとなる方向で検討しています。
2. 印刷版ニュースの発行も、印刷でなく電子版になる可能性があります。もし、評議員会で議論して認められた場合、61歳以上の会員の方で印刷体を特に希望される場合には、印刷して郵送するというサービスを行いたいと思います。希望される会員の方は、鍵 裕之総務幹事（<kagi@eqchem.s.u-tokyo.ac.jp>）までご連絡いただければと思います。

川幡穂高（次期会長）

ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会、書評、研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上、電子メールでの原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2014年3月頃を予定しています。ニュース原稿は1月下旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会ニュース・HP 幹事）

川幡穂高

〒277-8564 千葉県柏市柏の葉5-1-5
東京大学大気海洋研究所
海洋底科学部門

Tel : 04-7136-6140

E-mail: news-hp@geochem.jp

原田尚美

〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町2-15
海洋研究開発機構（JAMSTEC）
地球環境変動領域

Tel : 046-867-9504 / Fax : 046-867-9455

E-mail: news-hp@geochem.jp